

和名抄地名新考

はじめに

この標題を見て多くの人が思い浮かべたに違いないある業績がある。先年物故した、本学名誉教授池邊彌「1888」である。氏の名著に助けられてわたしが工藤「1979」（以下、「前稿」と略称する）を書いたのは、もう四半世紀前のことである。さらに、新しい資料によって大幅に増補改訂された池邊彌「1888」（以下、『池邊考證』）に基づいて、工藤「1980」（以下、「前稿」）を書いた。後者は、その副題のとおり、次々に報告される木簡や漆紙文書などを主な資料にして論じたものである。わたしはその稿の末尾に次のよう

工藤 力 男

に書いた、「そのほか、読みの確定できないもの、文字の確定できないものなど、残された問題は多い。それらは、さらに新しい資料が現われて、解決の糸口を提供してくれることを期待して、この稿を閉じることにしよう。」と。

そこに期待を表明した「新しい資料」がその後も出現しているかという点、必ずしもそうではない。平城京址の長屋王邸跡から出た大量の木簡などは、確かに古代の文字資料として貴重なものであるが、二つの前稿で残ったものをじかに解決に導いてくれるわけではない。だからとて、出土する当てのない木簡に期待するのは、百年河清を待つようなものである。そこで、今までに得られた資料の範囲内で為しうる限りの努力をしてみようと思ひ立つたのである。

古代地名という同じ対象であつても、それを考察するた
ちば・方法が、歴史学と地理学と言語学とで異なることに
ついては前稿 で述べたので、ここで多くは繰り返さない
ただ、本稿を始めるに当たつて一つだけ述べておきたいこ
とがある。『角川日本地名大辞典』(以下、『角川辞典』)全四
十九巻の完結後、それに採られた古代中世地名を主体にし
て編まれた『古代地名大辞典』全一卷「100」がある。そ
の本編は「あいいちのり 相市里」で始まる。「相市里」
は山城国紀伊郡にあつた、永久元年の文書に一度だけ見え
る条里の里名だという。ならば、この里名の読み方「あい
いちのり」は、後の人、というよりも現代の研究者がそう
読むということにすぎない。というのは、この時代この地
の日本語として、「あいいち」という語形は極めて存在し
にくいものだったからである。その意味で、この読み方に
は時代性が希薄だ、とわたしは考えるのだが、それは、和
名抄の地名を考える本稿の主題ではないので深入りはしな
い。述べたいのは別のことである。

巻頭第一ページには和名抄の郷名「あいかわのこう 藍
川郷」がある。『角川辞典』の四十九巻すべてを見たわけ
ではないので断言はできないが、このように 固有地名+

の+行政単位の音読 という形で読むことは、『角川辞典』
全巻の方針であつたと思われる。この叢書の刊行中から、
わたしはかかる読み方に違和感が強かつた。確たる根拠が
あつてこの読み方が採られたのだろうか。これと雁行する
ように刊行され、『角川辞典』と執筆者の重なることもあ
る『日本歴史地名大系』(以下、『地名大系』)では「あいか
わこう」と読んでいる。いずれが妥当なのか。

古代の日本人が土地の固有名に行政単位「里・郷・郡」
を付けて称するとき、その単位を「何某のガウ」のように
音読みすることはあつただろうか。この方式を現代の地名
に当てはめると、例えば「山田村」を「山田のソン」、「河
辺町」を「河辺のチヨウ」と読む理窟だからである。郷名
を「のゴウ」と読む『角川辞典』も、郡名の「秋鹿郡」
は「あいかゲン」、「愛甲郡」は「あいこうゲン」、「英多
郡」は「あいだゲン」と読んで、「あいかのゲン」のよう
には読まない。郡と郷里とでこのように読み分ける基準は
那邊にあるのだろうか。

そもそも、人は日常、行政単位まで含めて地名を呼ぶも
のだろうか。「こんど横浜市に引っ越したよ」「家族でめし
でも食おうと渋谷区へ出たんだ」「ドライブは箱根町にし

よう」などと言うことは滅多にないように思う。書類や郵便物などに住所を書くときは必要だが、役人が日常業務にそれを必要とすることは訳が違う。

古代の人たち、特に役人が正式に地名を呼ぶ必要が生じたとき、固有名に行政単位の付いた呼称、すなわちフルネームの地名「藍川郷」「愛甲郡」をいかに呼んでいたかを知るのは容易でない。古代文献は漢字で書かれているからである。それでも万葉仮名表記された歌は多く、例えば「大君の水底深く思ひつつ裳引きならし須我波良能佐刀」(萬葉集四四九一)によって、傍線部の結句を「菅原の里」と読むことが判明するが、これは歌の中の表現であって、これをそのまま襲の表現にも公式な呼称にも適用させることはできない。なぜならば、ひとつ川の名「明日香川」が、音数律の關係で「君により言の繁きを古里の明日香乃河にみそぎしにゆく」(同六二六)と詠まれるように、簡単に助詞「の」を介在させた「明日香の川」に変わるからである。

散文には音数律の制約がないので自由に読めるはずである。そう考えたとき、すぐに思い浮かべられるのは風土記である。なるほど地理の書たる風土記にはフルネームの郷

里が満ちている。現行の風土記の訓読で、郡は「ほり」、郷・里は「様」に「のさと」と読んでいる。『肥前国風土記』の基肄郡のように「郷陸所 里一十七」と、ひとつ文脈に郷制以前の「里」も共存するばあい、日本古典文学大系本は「里」に「こざと」の訓を与えており、決して「り」とは読んでいない。畿内の地名が多く見られる『日本靈異記』では、大倭の国、宇太の郡、漆部の郷(上巻第十三縁)のように読むのが普通である。仮名書きの散文、伊勢物語の初段は「むかし、をところひかうぶりにて、ならの京かすがのさとに、しるよししていにけり」で始まる。「京」だけは特別の存在ゆえに音読みされたが、続く里は「かすがのさと」である。今昔物語集では、「今昔、備中ノ国、窪屋ノ郡、大市ノ郷二一人ノ古老ノ僧有ケリ」(巻第十七第十八語)のように書かれる。現在流通している本はこの「国・郡・郷」をすべて訓読みしている。それは素朴ではあるが、まっとうな日本語の感覚というものである。

『角川辞典』が、右に推測したような素朴な読み方によらず、「藍川のゴウ」のような方式を採った背景には、歴史学者や郷土史家の間に行われていた一種の慣用語が用い

られたからではなかつたか。昨秋、岐阜県富加町で、「田
井畑の半井田」300冊出版。『田井』と冠称する
『密蔵圖書』300冊が、『田井』が行われた。それをさかの
ぼる一年半前、里名の読み方をめぐる論争を、『朝日新聞』
中部本社版の岐阜面「2002.6」が報じている。二巻からな
る町史「1975」の上巻では「はぶり」、五年後に出了下巻
では「はにゅうり」と読んでいるというのだ。これは、在
地研究者を中心に「はぶり」と称していたのだが、奈良国
立博物館のパンフレットに「はにゅうり」とあることを根
拠に変更したのだという。後者の読み方は、古代史家たち
に一般的な呼称である。いずれにせよ、研究者たちは、わ
ざわざ「はにゅうり」と言っているのはまだるこしいの
で、三四拍の「はぶり」「はにゅうり」と称して理解し得
たということであろう。研究者たちがそう呼ぶ便利さは理
解できる。しかし、それは飽くまでも限られた世界の慣用
に過ぎず、あえて言えば隠語である。それを一般称と錯覚
してはなるまい。

このように、歴史学・地理学のたちばから地名を扱う態
度は、言語の学からする処理とは異なることがある。土地
に捺印された語、それが地名であるからには、まず言語と

して処理しなくてはならない。その地名が、いつ、誰によ
って、いかなる言語で、いかなる原理によつて捺されたか
を、まず考えるべきである。これが従来のわたしのたちば
であつたし、現在も変わらない。その姿勢でこれからの考
察を進めようと思う。資料の多くを池邊氏に負うことも
「前稿」と同じである。その稿の「はじめに」の節を、
「資料の博覧は私の能力に余る。そのほとんどを仰いだ
という意味で、本稿は、『日本地理志料』と『和名類聚抄郷
名考証』というふもだしを借りてとつた相撲である。」で
結んだ。今の心境を同じように相撲用語の譬喩で言つと、
長らく胸を貸してもらつた池邊氏への恩返しの意味もこめ
て稿を起こすものである。

「前稿」にも書いたように、わたしは先師濱田敦教授
の授業でこの世界への関心を開かれた。先師はこの授業で
述べたことを文字にすることには積極的でなかつた。そこ
でわたしは、山城国を取りあげる際には特に、自分が書き
とめた先師の説を紹介しようと思う。また、日本語学徒の
目から見て不審なものを、できるだけ多く書き出しておく
つもりである。分からないものも率直に呈示して解決を後
学に託しようと思う。

和名抄の記載順に山城国から始める。各項目の言及箇所
に傍線を附す。論点の多寡、議論の繁簡によって、各項の
分量もまちまちになるであろう。文献の刊行年には必要に
応じてキリスト暦で角括弧内に書き、書誌は必要最小限にと
どめる。

考 察

一 山城国乙訓郡

乙訓郡については古代にも用例が多く、二音節の万葉仮
名の用法も理にかなっており、解釈上の問題はない。だが、
意外な所から二つの問題が出来た。

『池邊考證』は五種類廿六の用例を挙げている。大宝期
以後に正式な表記となつたらしい「乙訓」が大半だが、そ
れ以前の「弟国・墮国」のほか、平安時代の「乙国」一例
もある。そして、天平寶字六年造寺所公文の「乙容郡」が
ある。「容」の文字が何ゆえに「くに」の表記たりうるか。
それが当郡の問題の一つである。

わたしはどのように考えても、「容」の文字から、音と
しても訓としてもクニを引き出すことはできない。『大日

本古文書』五〔108〕に左記のように翻刻されて以来、
人々はこの文字で論じつづけてきた。

津国手嶋郡上秦郷戸主倉真万呂戸口古万呂

山背乙容郡小野郷戸主鳥部廣嶋戸口足嶋

今は、幸いにも『正倉院古文書影印集成』第九卷〔1085〕
によつてその文字を見ることが出来る。天平寶字六年六月
廿一日、村刀祢大伴虫万呂の書いた「謹解 申檜皮蓋工等
食功請事」と題する文書にそれは見える。その箇所を同書
から写して掲げる。

写真から「乙」の下を文字を直ちに「容」と判読するこ
とはかなり難しい。百聞は一見に及かずであるが、これは、
書き手がほんとうに「容」の字を書こうとして筆を運んだ
結果であろうか。そもそもウ冠の初画の有無も定かでない。
旁が「容」だとしても、その第二画はわかるが、ほかはむ
しろ「右」に近い印象だ。書き手が決して能筆でないこと
は、「郡」が「神」の崩し字かと見紛ふことから言えよ
う。それは、右の行の「手嶋郡」でも同様である。これだ
けで判断することは危険だが、虫万呂は「容」の字を書き
かけて「宕」に戻したのではなからうか。この人の筆跡が
ほかに見られないことが遺憾である。

八引十文

給ふ二名古万石 島部是也

在二同心給申

津国手嶋郡上秦郡金倉真子八石
山背乙訓郡金倉真子八石

奉書于六月廿日

村刀祿大伴聖万石

先師濱田敦は、「容」は「宕」か「當」の誤記で、オトクニならぬオタギかとした。わたしは結果をそう書き留めてあるが、詳しい論証はしなかつたと思う。直感による推測だつたかもしれない。この影印を見ると、先師の予言どおり、「宕」の蓋然性がきわめて大きいと言えよう。

それから廿二年後、長屋王の邸宅跡から出土した木簡に興味ある記事が見いだされた。

无位出雲臣安麻呂 年廿九
山背國乙當郡

(平城宮発掘調査出土木簡概報・二十一)〔1989〕

これはその上半分で、下部には上日した日数が書かれている。掲載された写真でも、考課木簡の端正な文字がはつきりと読み取られ、誤読の恐れは全くない。「乙當郡」はオタギ郡を書いたとおぼしい。オタギなら「愛宕」あるいは「愛當」がふつうの表記なのだが、「愛」を「オ」の仮名に用いる特異性(何れ言及する予定)ゆえに、オトクニの「乙」と紛れてしまったものに違いない。先の「乙容郡」が「乙訓郡」ではなく「愛宕郡」であつた蓋然性が俄かに大きくなつたと言えよう。

結論は以上で尽きるが、状況証拠を若干呈示しよう。

当該条に見える鳥部廣嶋戸口足嶋は小野郷の人とある。もし「乙容郡」が、従来そう信じられてきた乙訓郡であるなら、そこに小野郷があるはずである。しかし、奈良・平安時代、乙訓郡に小野郷の存した形跡は全く見当たらない。その事実だけでも、乙容郡を乙訓郡と即断することはできないはずだが、なぜかそこが見落とされてきた。「小野」はありふれた郷名で、じつさい和名抄は山城国では愛宕郡と宇治郡にこの郷名を載せているのに。

この人物は「鳥部」氏である。和名抄の愛宕郡には、小野のほか、夢倉、栗野、粟田、大野、錦部、八坂、鳥戸、愛宕、賀茂、出雲郷がある。平安時代、正式表記は「鳥戸」だったかも知れないが、『池邊考證』によると、実際の用例は奈良時代以来の「鳥部」が圧倒的に多い。よって鳥部と鳥戸は同一地と見て誤りなからう。当該条の鳥部氏は愛宕郡鳥戸郷ゆかりの人であつた蓋然性が大きい。

以上、「乙容」は「乙宕」とも読めること、長屋王家木簡に「愛宕郡」を「乙當郡」と書いた例があること、「鳥部廣嶋」の居住地小野郷が乙訓郡には存せず愛宕郡には存すること、愛宕郡には「鳥部」氏と同じ「鳥部」郷が存することを明らかにした。これによると、大日本古文書に翻

刻せられ、百年来「オトク二郡」と読まれてきた「乙容郡」は、「乙宕郡」と解すべきだということになる。

正倉院文書の「乙容郡」を少しも疑わなかった池邊氏は、「乙容郡」に続く「小野郷」を、和名抄に記載のない郷名として、乙訓郡の最後に括弧付きで掲げた。

（小野郷） 天平寶字六、六、廿一、造寺所公文。

小野、伊勢物語、83。

その地は、未詳ながら伊勢物語の小野に当たると考えたのだらうか。その伊勢物語第八十三段後半の一文を、森野宗明校注の講談社文庫本から引いてみよう。

む月に、「をがみたてまつらむ」とて、小野にまうでたるに、ひえの山のふもとなれば、雪いとたかし。

比叡山の麓にある「小野」には、「今の京都市八瀬大原のあたり」の脚注がある。

大ざっぱに言つと、乙訓郡は京都市の桂川の西側に広がる地域、愛宕郡は市の東側に広がる地域である。「乙容」は乙訓ではありえず、その小野郷は、伊勢物語の小野と同じ愛宕郡の地にあつたと考えるのが最もしぜんである。

もう一つの問題は、この郡名の起源に関わる言説である。例えば、『角川辞典』の「乙訓郡」の項にはこうある。

乙訓郡ははじめ葛野郡に属し、その一部であったが、大宝令施行時に葛野郡から分離したもので、葛野郡の兄国に対する弟国であって、のちに乙訓の字を用いたのである。

『地名大系』『京都府の地名』の結論もこれにほぼ等しい。現行の他の地名辞典の中では、楠原佑介他編著『古代地名語源辞典』が「弟国は兄国に対する地名か」と判断に慎重さを残しているが、吉田茂樹著『日本古代地名事典』は断定している。かかる言説は何によるのだろうか。管見ではその淵源を江戸時代在地誌類に見出だすことができなかった。吉田東伍の『大日本地名辭書』（以下、『地名辭書』）に、「本郡は古へ葛野より分かれ乙訓の名は弟国（オトノクニ少国の義）の謂なるべし」と推定の形で述べたのが早いものだろうか。

『地名辭書』の言つように、乙訓郡が葛野から分離してできた蓋然性はきわめて大きい、それを伝える文証は知らない。それなのに、さながら文証があるように記述する『角川辞典』ほかの態度には賛成できない。かりに葛野郡から分けて建郡されたのだとしても、その建郡の時期を大宝令施行時と断定する根拠があるのだろうか。また、続日本紀・大宝二年に見える「乙訓郡」は、確かにのちの表記

だと言えるのだろうか。

当郡の古い用例として、古事記と垂仁紀十五年に伝える起源説話の「墮国」「弟国」、継体十二年紀の「弟国」がある。前者において、ヒバスヒメが墜ちて死んだので、「墮国」と名付けた所を今は「弟国」と言うのだすること、記紀の説話はほぼ同じである。もし『角川辞典』ほかが言うように、大宝令の施行によって建郡されたのだしたら、その地名も、今は「乙訓」というのだ、と記紀に書かれるはずではないか。「兄国・弟国」という呼称と表記自体こそが、令制以前の呼び方であることを語るといふものだろう。そして、大宝令の施行以前にすでに乙訓郡は存在したと断言せざるを得ないので、『角川辞典』などの記述は成り立たないと考えるものである。

藤原宮跡の第二十九次調査の結果が『木簡研究』三号「198」に報告された。そこで出土した木簡に、

弟国評輶岡三

の一点がある。上部が闕損しているが、山背国のもとと推定されている。東面大垣地区から同時に出土した二十九点の木簡のうち、荷札は千支で年次を記すものが七点、年次を記すものが慶雲・和銅の三点、年紀のない木簡でも評表

記が十二点、郡表記が十一で、荷札の過半は大宝以前の
ものである、と報告者の加藤優は書いている。

この木簡の出土によって、乙訓郡が大宝以前に建てられ
ていたことは動かない事実となった。右の報告で加藤氏は、
「これまで大宝令の施行に伴い葛野郡から乙訓郡の分割が
行われたという説が有力であったが、再考の必要が生じ
た」とも書いている。歴史学の世界では、いつの間にか大
宝令施行云々の説が支配的になっていったようだ。

なお、訓字表記「弟国」から、音仮名表記「乙訓」に変
わったことも、七八世紀の交における他の地名表記の変更
と軌を一にするものである。こうしたことこそ、歴史学者
が最も神経質に議論してきたものではなかったろうか。わた
しの目には意外な盲点と映ったのである。

二 山城国乙訓郡鞆岡郷

郷名「鞆岡」は、諸本の訓によつて「ともをか」と読み、
後世、表記が「友岡」に転じて今に至る。どの位置から見
たのか知らないが、郷内の主要部にある岡の形に由来する
名と考えられる以外に地名として議論すべきものはない。

この郷名における日本語学の問題は「鞆」の字である。

十巻本和名抄の射藝部に「鞆在臂避弦具也、和名止毛、楊
氏漢語抄云、日本紀用鞆字、俗亦用之、本文未詳」とある。
撰者の源順もこの文字の典拠を極めることができなかった
ようだ。谷川士清『日本書紀通證』に「字彙補有鞆字、義
闕、日本紀用此、盖別有所拠也」とあることも、「鞆」の
字がシナでは一般に用いられた文字ではなかったことを語
っている。その「鞆岡」の表記がすでに七世紀に存したこ
とは、前項に引いた藤原宮址木簡「弟国評鞆岡三」に明ら
かである。

源順が日本紀に鞆字を用いることがあると言つのは、応
神天皇即位前紀、天皇誕生時に腕に「鞆」状の肉があつた
という箇所を指すのだろう。「鞆」は古事記・萬葉集・風
土記にも見える。したがって、八世紀の日本語社会には相
当広く行われていたものと考えられる。源順が「本文未
詳」と言い、従来その典拠が明かされたということを聞か
ない。かくて、日本製の文字すなわち「国字」として扱わ
れてきたのである。従来、古代文献に見出だされた国字は
かなりの数に上る。『新撰字鏡』小学篇に集められた多く
の国字は、実際の使用が確かめられないものが多いので除
くとして、萬葉集の「槌」「俣」「鳴」「檉」、風土記の

「楯」、古事記の「俣」などがある。ここでまず問題なのは、なぜ「鞞」が用いられずに「鞞」が作られたかということである。しかし、この問に対して明快な解答を用意することとは難しいが、以下に一つの推測を試みる。

古代、射藝の具としては他に「こて」があった。天治本『新撰字鏡』に「鞞 古岸反、射弓時調度也、古弓」と見えるほか、観智院本『類聚名義抄』の「鞞」に「コテ、タマキ」、前田本『色葉字類抄』に「射鞞 シヤコウ、コテ、又タマキ、射具也。小手同」とある。これらから推して考えるに、「こて」の表記は早く「鞞」に固定した。それが通常の語であつたからである。弓を射る際に用いる似たような道具を指す古語「とも」もあつた。それに漢字を与えようとしたとき、「鞞」はすでに「こて」の訓を負つていた。そこで「とも」の訓を負う国字が求められたのではなかつたか。

そのように推測して残る問題は、「鞞」がいかなる原理で作られた国字かということである。国字は、和語を書き記すために作られた文字である。「鳴」「鯨」「鰐」のように、後に旁を音読みして、疑似形声文字とも言うべき字が若干ある。また「鰐」「鰐」「鰐」「鰐」のように中世以降に

作られた、音読み・西洋語読みの国字も稀にはある。しかし、訓のみあつて音のないことが一般である。したがって、ほとんどが会意文字の原理で作られている。これも国字についての常識であろう。そのような国字の中に「鞞」を置いてみると、「革」偏は当然である。しからば旁の「丙」は何か。これについて言及したものを、わたしは知らない。先師の説は、わたしの記憶とノートに誤りがなければ、次のとおりであつた。「鞞」は形声文字、「革」が意符、「丙」が音符なのであろう。「丙」は㐄の音を表わすのではないか。すなわち、漢字の原音を借りて、弓の弦が鞞に当つて発する音「ピン」を表わしたものであろうと。わたしの知る限り、かかる構造を有する国字は他にない。

三 山城国葛野郡葛野郷

東急本・元和本は和名抄郡部の「葛野」に「加止乃」の訓、高山寺本は郷里部に「カトノ」の振り仮名があるが、ともに第二音節の清濁は断定できない。カドノと呼ばれて現在に至るが、古代はいかに呼ばれたのだろうか。

この郡郷名は、もと野の名称であつたのが行政単位の名に転じたこと明らかである。『池邊考證』に掲げる資料

によると、郡郷はもとより、県、河川、井、さらに氏族名まで「葛野」の表記一色で、たいそう安定した表記であったと見える。古事記・中巻、応神天皇段の記事に「葛野」とあり、応神天皇が歌ったと伝える歌謡にも見える。

千葉の 加豆怒を見れば 百千足る 家庭も見ゆ 国の秀も見ゆ（日本古典文学大系『古代歌謡集』による）

右の傍線部がもとの仮名表記で、これに対応する応神紀六年二月の全同の歌謡では「伽豆怒」である。かくて奈良時代は「カヅノ」と呼ばれていたことが分かる。第二音節の清濁が不明な和名抄の訓も濁音「ド」であつたのだらう。

そこで次は、第二音節におけるヅからドへの変化の問題が生ずる訳であるが、この点にはさほど大きな困難はない。日本語史の教えるところでは、ウ列音とオ列音との交替はかなり頻繁に見られた現象だからである。奈良時代にはア列音とオ列乙類音との間に、かなり規則的な音の交替が見られたが、ウ列音とオ列音との交替にそれほどの規則性は見られない。これを 音の変化 と言わずに 音の交替 と称するのは、新古の判断が難しかったり、一度変化しながら元に戻ったりするからである。奈良平安時代の例を少し挙げて、語義と文法性を示すために適当な漢字を括弧書

きしよう。

コモリヅノコモリド（籠処） スグスノスコス（過）
ススクノソソク（灑） タカマツ（高松）ノタカマト
（高円） ツガノトガ（梅） タツキノタドキ（跡状・態）
ツブノツボ（壺） フムノホム（踏） フツクロノフツ
コロノフトコロ（懷） マツフノマトフ（纏） マツシ
ノマドシ（貧） ミムロノミモロ（御室） ムコノモコ
（簀） ユリノヨリ（格助詞）

奈良時代の語例で特殊仮名遣の書きわけが存するばあい、オ列音は甲類の仮名であることが一般である。

右の挙例を見ると明らかのように、破裂音、特にタ・ダ行音の多いことが特徴である。破裂音は調音の際に音の持続が短くて、聞き紛れることが多いからだらう。規則性の稀薄な音声現象と判断されるゆえんであるが、「葛野」のカドノ・カヅノはまさにその例なのである。だが、これでこの地名についての疑問がすべて解けたわけではない。

「前稿」で述べたように、和名抄には原則として音訓を交ぜた地名はない。前稿ではこの郡郷名はともに正訓表記と見て特に取り上げることとはしなかったが、近年発掘された平城宮木簡二点に、従来知られなかった郡名表記が見

えるのである。

甲・進上葛濃郡 米 二石 十月十五日□

・和銅 年十月 九日 辰時

(平城宮発掘調査出土木簡概報・二十五)

乙 年卅九

国葛濃郡

(平城宮発掘調査出土木簡概報・三十三)

甲木簡は下端に穿孔があり、記載内容から推しても荷札と考えられる。乙木簡はいわゆる二条大路木簡の一片で、同時に出土した膨大な数の木簡には、勤務評定に関わる文言が多く見える。乙木簡で空欄にしてある文字は「山背」と推読されており、当該郡ということになる。下字の「濃」はノ甲類の音仮名で、「野」の表記と矛盾しない。上字の「葛」も音仮名なのだろうか。すると、「二音節仮名で「カツ」と読むのが自然である。これでは記紀の歌謡のカツノと一致しない。ここに至って考察は一頓挫する。

古代、カツラとよばれる物は二種類あった。ある種の蔓性植物の総称と髪飾りの一種とである。植物のカツラのツラはツルの交替形かとする(例えば『時代別国語大辞典』上代

編)のは自然な解釈だと思つ。髪飾りのカツラの語構造を髪^カ葛^ツかとする解釈(同書)も妥当であろう。カツラ(葛)を右のように解釈すると、カは何かの接頭辞で、語の中核はツラに存する道理で、本来は「カーツラ」であったと考えられる。それを、この郡郷名表記では「カツ(葛)ーラ」と分析して、ラを接尾辞のように扱ったように見える。異分析である。接尾辞「ら」の用例は古代語にはふんだんにあるので、起こりうる現象である。

しからば、平城宮址出土木簡の「葛濃」も「葛野」と同じに考えてよいのだろうか。事はそう簡単には運ばない。確かに勤務評定のための考課木簡なら、さほど厳密な表記を志向せず、粗略な表記ですますこともあるだろう。だが、「野」をあえて「濃」に変えていることは、書き手には音仮名で揃えようという配慮があつたのではないかと疑わせるものがある。かく言うのは、萬葉集には東国地名「葛飾」に関わつていささか似た事情があるからである。

武蔵国の地名葛飾は萬葉集の歌に十例、題詞・左注に三例見える。訓字表記は「勝鹿」「勝牡鹿」、音仮名表記は題詞の「葛飭」一例である。この「勝鹿・勝牡鹿・葛飭」から考えられる語形は当然「カツシカ」である。歌には、い

ずれも東歌で一字一音の仮名表記の五例があり、第二音節の仮名は、「都」が二、「豆」が三である。「豆」は一般に濁音に当てる仮名なので、これによると「カツシカ」となる。なお、紀州本以後の古写本は、「過勝鹿真間娘子墓時、山部宿祢赤人作歌一首」(四三)の題詞下に細字の注記「東俗語云可豆思賀能麻未能豆胡」をもつ。現在の萬葉集研究では、この注記は無視できないとして、中央語と現地語とで地名の発音が異なつたと考えるのが一般である。それは、現代の東国の音韻状況から古代の状況を推測しての処理である。

正式な表記は「葛飾」で発音はカツシカだが、現地の発音はカツシカであつた。しかも「葛」の訓はカツラである。ここに二重の意味で「葛」の第二音節の清濁の自覚が曖昧になる契機があつたことになる。つまり、この漢字の音と訓の近似性が加わつて、東国の「葛飾」において、カツとカツの懸隔が定かでない状況があつたのではないか。山城国の葛野郡・葛野郷にも類似の事情、「葛」の音カツと訓カツラとの干渉があつた、というのがわたしの推論である。こうでも考えないと、この地名は解けないと思う。

この推論の背景にはもう一つの根拠がある。やはり山城

国乙訓郡の「物集郷」(訓は、高山寺本が毛都米、東急本が毛豆女)である。古代の資料に見る限りにおいて、この表記「物集」は揺れておらず、よほど早くに固定したとおぼしい。この郷名を訓字による表記と見ると、モノの下略とアツメの上略によるという極めて変則的な表記となる。前稿

第六節に紹介したように、先師は、漢字「物」の音モチ・モツと訓モノが音相において近く、「あつめ」は「あつめ」と分析しうるとし、「物」の訓「もの」の下略形「も」と「つめ」との複合形と解釈した。先師はまた、当時すでに地名の由来が忘れられていただろうとも語つた。和名抄の地名には、成立が古くて原則で解けないものがあること、この「物集」が最もよい例だろう。また、当国愛宕郡の郷名と山陰道の国名の「出雲」などは頭字「出」と下字「雲」が、「いづも」の語形とわずかのずれしかないので、かえつて処理しにくい。このように語形と文字との関係が説明しがたいものはなおあつて、早く古事記の上表文において撰録者の太安萬侶が、「姓に於きて日下を玖沙訶と謂ひ、名に於きて帯を多羅斯と謂ふ、此くの如き類は、本の随に改めず」(日本古典文学大系本の訓読による)と書いた「日下」「帯」がある。古代の地名では「飛鳥」も

解きえないこと、斯学に携わる者の常識である。やはり「前稿」第六節に挙げた和泉国大鳥郡の郷名「常藻」は、「今為深井 不加井」の注によつて初めて読めるもので、字謎とでも称すべきものである。それほど難解さはない、その由来の知らない人にはやはり難しい地名も多い職業部に關わる「刑部」^{あさかへ}、「文部」^{ぶんぶ}、「服部」^{はつふ}をはじめ、「委文」^{せいぶん}「神稻」^{くましう}、そして「樂前」^{がくぜん}（但馬国氣多郡）などがある。

以上のように「葛野」は、「出雲」「飛鳥」などと同様によほど古い地名と思われる。それを漢字で表記しようとするとき、字訓の語形と字音の近似することから、相互干渉が起こつて生まれた表記であつたと解したい。

この郡郷名について先師は、和名抄には原則として音訓交用表記の地名がないこと、タ行音は破裂音なので、ツノトの交替は比較的起こりやすいと述べたが、明確な結論は出さなかつたように思つた。

「文 献」〔括弧内の矢印の下は略称〕

池邊 彌「1961」『和名類聚抄郷名考證』

池邊 彌「1981」『和名類聚抄郡郷里驛名考證』（◇）池邊考證

吉田東伍『大日本地名辭書』（◇）地名辭書（◇）

村邨良弼『日本地理志料』（◇）『地理志料』（◇）

角川書店『角川日本地名大辭典』（◇）『角川辭典』（◇）

平凡社『日本歴史地名大系』（◇）『地名大系』（◇）

工藤力男「1979」『言語資料としての和名抄地名 音訓交用 表記の検討』（◇）『岐阜大学教育学部研究報告 人文科学』

27 ◇「前稿」

工藤力男「1980」『木簡類による和名抄地名の考察 日本語 学のたちばから』（◇）『木簡研究』12 ◇「前稿」